

■ オシムの言葉、再び ■

2006～07 年だから、今の高校生にすれば、まだ物心がつかない頃、サッカーの日本代表監督にイビチャ・オシムという人がいた。就任前、J 1 のクラブを初タイトルに導く。含蓄ある言葉で選手を鍛え、鼓舞した名指導者だった。日本だけでなく世界に恩人と仰ぐサッカー選手がいる。

彼が世間に知られるようになったのは、指導力もさることながら、自己の哲学から発した言葉が、多くの選手やファンの心をつかんだからだ。これらは「オシム語録」と呼ばれた。80 歳での訃報に接し、再度、読み返してみる。

「肉離れ？ ライオンに襲われた野うさぎが逃げ出すときに肉離れしますか？ 準備が足りないのです。私は現役のとき一度もしたことはない」。「お前らアマチュアか。おれはプロだ。死ぬ気でこの試合に臨んでいた。お前たちにその気持ちはあったか？」。試合後の控え室で選手を怒鳴り散らすこともあった。

言葉は厳しく、選手に対する要求水準は相当高い。しかし、この人が語れば、信じてついて行きたくなるような説得力があった。民族が対立した旧ユーゴスラビアで代表監督を務めたオシムには、対立を越え、選手を団結させるため、魔法のような力を持つ魅力ある言葉が必要だったのだろう。

さて、大型連休を挟んで、学校は平時に戻った。新学期に入り、1 カ月が過ぎたとはいえ、まだまだ緊張が続いていて当然である。特に、1 年生にとっては、勉強についていけるかという不安、楽しい部活動と両立していけるかという心配があるだろう。高校生活の疲れも出る頃である。

さらに、ここから 1 学期の中間試験へ向かう。友達や家族と話をすることで、少しは和らぐだろうが、経験をしてみないことには分からないこともある。「ゲームに負けることはある。ただ負けるにしても自分たちのプレーをやりきって負けるのと、そうでないのでは大きな違いだ」。これも「語録」にある。「負ける覚悟も含めて、すべてにおいて、完全な準備をしなければならない」。まずは、しっかりと納得のゆく準備を進めよう。

加えて、試験に勝ち負けはないのだが、結果を受け止めるときに、参考になる言葉もある。「勝つと見えなくなるものがある。負けるのは嫌だが、敗北は最大の師だ」。「自分を信じることだ。自信の無い者に戦う資格は無い」。奢らず、そして怯まず、次へ気持ちを切り替えて行けばよい。

最後に、大人への言葉。その要求も高い。「あなたは、息子さんを『最後まであきらめずに走る子ども』に育てましたか？」。泉丘高は、全ての在校生を「最後まであきらめずに走る生徒」に育てたいと思っている。